

**外国語教育メディア学会(LET)
第79回 (2012年度春季) 中部支部研究大会**

プログラム

日時： 2012年5月26日 (土) 10:30-18:00

会場： 名古屋学芸大学短期大学部
5号館・6号館

〒470-0196 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57

主催： 外国語教育メディア学会(LET)中部支部

問い合わせ先：

〒487-8501 春日井市松本町1200

中部大学 語学センター

外国語教育メディア学会中部支部事務局 小栗成子

電話：0568-51-6649

メール：支部サイト(<http://LET.lang.nagoya-u.ac.jp>)の「お問い合わせ」

日程

10:00	受付	5号館1階ホール
10:00	展示	5号館1階ホール
10:30	開会行事	5号館521マルチメディア演習室
	司会：	伊藤 隆 (名古屋学院大学)
	開催校挨拶：	黒澤 宣輝 (名古屋学芸大学短期大学部長)
	主催者挨拶：	尾関 修治 (LET中部支部支部長)

10:40-12:00	講演	521マルチメディア演習室
	「認知言語学を参照した英語学習支援法 —言語の部分的動機づけと日英語の認知様式の違いに目を 向けさせる授業実践—」	
	講師：	今井 隆夫 (愛知みずほ大学)
	講師紹介：	村尾 玲美 (名古屋大学)

本講演では、「感覚英文法」に基づく授業実践の例について理論も交えながらお話しします。「感覚英文法」とは、普通の感覚を持つ人なら、すんなり納得できるものであり、大概、英語の母語話者からも賛同を得られるという性質のコミュニケーション力向上につながる文法概念の記述方法のことである。それは、認知言語学の言語観と大変相性が良いものである。また、認知言語学の道具立てと相性のよい教授・学習方法は、英語教育の現場やGood Language Learners (外国語学習に成功している人)といわれる方々の学習方法の中にも見られるものでもある。

具体的には、(1)「文法」＝「言語知識」という動的用法基盤モデルを参照した文法観を基本概念、(2)言語表現は、恣意的 (arbitrary) な面があるものかなり多くの部分は、動機づけられている (motivated) と言われる。つまり、なぜそのような表現になるのかの説明がされるのである点、(3)部分的な動機づけを与えることの英語学習支援における有用性、(4)コミュニケーション力向上につながる文法学習、を中心に、実際の授業での実践例を中心に紹介したいと思います。

形 (form) と意味 (meaning) の対応関係 (symbolic structure) を重視し、例えば次のようなクイズにより、言語の部分的動機づけと日英語の認知様式の違いに目を向けさせています。

(a) Obama has visited Princeton.とは言えるが、Einstein has visited Princeton. という文がawkwardなのはなぜ？

(b) I love the music in the waiting room. と I'm loving the music in the waiting room. の意味の違いは？

(c) take care of を使って文を作ると？

(d) I don't like shelf. I'd rather eat table. (Langacker) という発話はどのような T P O なら可能か？

今回の講演では、60分という時間枠の中で、「コミュニケーション力向上のための感覚英文法」の一部を紹介します。2010年時点での記録は、今井隆夫

(2010) 『イメージで捉える感覚英文法：認知文法を参照した英語学習法』
(開拓社) を参照いただければと思います。

12:00-13:30 昼食・展示

12:10-13:00 役員会

13:30-14:00 支部総会 521マルチメディア演習室

14:00-16:15 研究発表 523・525講義室・611 LL視聴覚室

(1) 14:00-14:30 (2) 14:35-15:05 (3) 15:10-15:40 (4) 15:45-16:15

<第1室>

523講義室

司会：厨子 光政 (静岡大学)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

(1) 「ウェブを利用した英単語並べ替え学習ソフトにおける問題提示と
評価方法に関する提案」

厨子 光政 (静岡大学)

宮崎 佳典 (静岡大学)

法月 健 (静岡産業大学)

三木 良介 (静岡大学大学院生)

(2) 「速聴トレーニングによるリスニングの全体的処理能力と分析的処
理能力の促進」

梶浦 真由美 (名古屋大学大学院生)

(3) 「文法性判断課題における第二言語の文法形式の誤りに対する注意
の測定—瞳孔径計測データを用いて—」

梁 志鋭 (名古屋大学大学院生)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

坂東 貴夫 (名古屋大学大学院生)

福田 純也 (名古屋大学大学院生)

杉浦 正利 (名古屋大学)

(4) 「学習者は意味理解を目的とした読解課題中に文法形式の誤りを検
出できるか—視線計測を用いて—」

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

梁 志鋭 (名古屋大学大学院生)

坂東 貴夫 (名古屋大学大学院生)

福田 純也 (名古屋大学大学院生)

杉浦 正利 (名古屋大学)

<第2室>

525講義室

司会：小栗 成子 (中部大学)

柳 善和 (名古屋学院大学)

(1) 「学習者の自律的成長を促すアプローチ～マジカルワークショップ～」

小栗 成子 (中部大学)

Amy Stotts (中部大学語学センター)

(2) 「高校英語教育における学習者の動機付けを高める教授法の検証」
坂 望美 (名古屋大学大学院)

(3) 「小学校外国語活動における電子黒板の効果と新教材『Hi, friends!』の指導法」

高橋 美由紀 (愛知教育大学)

柳 善和 (名古屋学院大学)

(4) 「新学習指導要領における中学校英語のデジタル教科書の構成と利用方法について」

柳 善和 (名古屋学院大学)

高橋 美由紀 (愛知教育大学)

<第3室>

611 LL視聴覚室

司会：鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

城野 博志 (三重県立四日市南高等学校)

(1) 「聴覚障がい者による英語の句・複合語アクセント学習についての考察—アメリカ手話と日本手話の比較—」

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

(2) 「屈折形態素のシフトコストにおける非対称性に関する考察」

城野 博志 (三重県立四日市南高等学校)

16:30-18:00 懇親会

4号館1階ホール

研究発表概要

<第1室>

発表1 ウェブを利用した英単語並べ替え学習ソフトにおける問題提示と評価方法に関する提案

厨子 光政 (静岡大学)

宮崎 佳典 (静岡大学)

法月 健 (静岡産業大学)

三木 良介 (静岡大学大学院)

教育現場における e-ラーニングシステムの導入の進展に伴い、学習時の状況について詳細な履歴が記録されるようになった。この履歴情報を精査することによって、学習時における思考過程や問題に対する学習者の反応を、マウスのクリック情報のみならず、軌跡情報からも分析できる可能性があると考えられる。本研究の最終目標は、英語並べ替え問題に取り組む学習者の「迷い（自分の解答に対する自信のなさ）」を解答時のマウスの動きを数値的に分析し、正しく理解した上で解答を導き出したか、あるいは、偶然に正解へとたどり着いたかを区別して、学習者のニーズに合った学習項目の検索を可能にし、教師側での補習や追加学習のサポートとなる「指標」を定めることである。この目標達成の過程として、マウスの軌跡における「迷い」のデータの識別方法、部分採点法の導入の可能生、並べ替え問題のソフト上での初期設定における問題点の検証を試みる。

発表2 速聴トレーニングによるリスニングの全体的処理能力と分析的処理能力の促進

梶浦 眞由美 (名古屋大学大学院生)

門田(2002)は、日本人英語学習者のリスニングが上達しない理由は音声認識において、大部分を全体的チャンク処理よりも分析的な処理方法に頼ることが原因であると示唆している。河野(2001)によると、全体的音声処理機構は分析的音声処理機構よりも音節が生起する間隔が短いときに作動する。このことから、速聴による訓練と全体的処理能力の間に関係があることが期待される。本研究では、全体的音声処理を促進することを目的とした速聴演習の効果を検証した。TOEICリスニング教材を使用し、模擬テスト、トランスクリプト読解後の再テストという手順で、リスニング練習を標準速グループと速聴グループに分けて実施した。各5日間のトレーニングを通した事前事後テストの結果は両グループとも有意に向上した。また2倍速の聞き取りにおける事前事後テストの結果は速聴グループのみ有意な差が認められた。発表では実験結果に基づき、音声言語の認識メカニズムについて議論する。

発表3 文法性判断課題における第二言語の文法形式の誤りに対する注意の測定—瞳孔径計測データを用いて—

梁 志鋭 (名古屋大学大学院生)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

坂東 貴夫 (名古屋大学大学院生)

福田 純也 (名古屋大学大学院生)

杉浦 正利 (名古屋大学)

第二言語における文法処理能力の測定に、従来、反応時間を使った文法性判断課題が用いられている。しかし、全文に対する反応時間では文法的な誤りのある箇所に向けて注意を向けて判断しているかどうかを特定して測定することができない。

本研究では、生理的反応である瞳孔径の変化を計測する方法を用いて、対象領域に注意が向くかどうかを測定することで、第二言語での文処理における文法性判断と注意の度合いの関係を調べた。

刺激文はEllis et al. (2009) を参考に、以下のような文法文と非文法文を作成した（角括弧内箇所を対象領域）。

例1. Sam wanted to know what [they had] told John. (文法文)

例2. Sam wanted to know what [had they] told John. (非文法文)

視線計測装置を使い、文法的な誤りを含む文と含まない文（合計48文）における対象領域での瞳孔径を英語学習者16名について測定した。

その結果、文法文と比べて、非文法文の対象領域において、瞳孔径の平均値が有意に大きかった。これは文法的な誤りのある箇所、より多くの注意が向けられたと解釈でき、第二言語における文処理において学習者も非文法箇所を注意を向けていることが示唆された。

発表4 学習者は意味理解を目的とした読解課題中に文法形式の誤りを検出できるか—視線計測を用いて—

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

梁 志鋭 (名古屋大学大学院生)

坂東 貴夫 (名古屋大学大学院生)

福田 純也 (名古屋大学大学院生)

杉浦 正利 (名古屋大学)

第二言語処理能力が上達すれば文法的な誤りに気付く能力も高くなると考えられる。しかし、読解を行う際に、注意が言語形式に向けられる場合と意味理解に向けられる場合とでは、誤りの検出には差が出る可能性がある。自然な読解であっても、気づきやすい誤りとそうでないものがあるのではないかと、そしてそれが第二言語における文法項目の習得のしやすさに関係しているのではないかと考えられる。

本実験では、英語学習者16名(TOEIC平均:849.13)を対象に、意味理解を目的とした読解を行う際の視線計測データを観察することで、誤りの種類(埋め込み疑問文、仮定法、不定冠詞、3単現-sの4種類)とその気づきやすさを調査した。

視線計測の測定値における二元配置分散分析(文法×文法項目)の結果、文法性の主効果が認められなかった。このことから、意味理解を目的とした読解中に形式の誤りを検出する事は、学習者には難しいと考えられる。しかし、2要因の交互作用の分析では、仮定法における文法性、埋め込み疑問文における文法性の単純主効果が見られた測定値も存在した。その為、この二つの項目が持つ言語学的要因の影響についても検討した。

<第2室>

発表1 学習者の自律的成長を促すアプローチ～マジカルワークショップ～

小栗 成子 (中部大学)

Amy Stotts (中部大学語学センター)

勤務校には、語学専用自主学習室がある。これは「語学習得には自らが学ぶ意識が不可欠である」という思想のもと、1988年に丹羽義信氏が提唱したものである。設立当初からの姿勢は20年以上を経た今も受け継がれ、学習者がまず「自ら一歩を踏み入れ、自らの意志で語学を行う」ことがかなうよう支援を持続している。著者は、自主学習の方向性を希望者と考える取組み「英語自主学習カウンセリング」を2000年より開始し、予約制で長期・短期的目標設定を促し、個々の目標に即した段階的な学習教材の提案し、学習方法を提案してきている。カウンセリング後の自主学習室利用者の学習動向やニーズを踏まえ、著者は自主学習支援のための特別講座「マジカルワークショップ」を2011年度より開始した。これは全学に公開されているもので、自主学習室利用者のニーズに応えるためだけでなく、自主学習を開始していない学生に対して自主学習への関心を高めるための取組みでもある。本発表では、学習者の自律的成長を支援する取組みとして本講座の取組み内容とその成果を報告する。

発表2 高校英語教育における学習者の動機付けを高める教授法の検証

坂 望美 (名古屋大学大学院生)

教育活動において、学習者の学ぶ意欲は学習の成否に大きく関わるものと考えられる。廣森(2006)は学習者の3つの心理的欲求(自律性・有能性・関係性)が相互的に関連しながら、日本人大学生の「動機づけ要因」としての働きを持っていることを示した。本研究の目的は、自己決定理論に依拠して、日本人高校生の英語学習の動機づけを高める実践を行い、その効果を検証するものである。学習活動に幅広い選択と責任を提供し(自律性)、建設的・情動的なフィードバックを与え(有能性)、他者と話しあひ学びあう機会を作る(関係性)ことで、3つの欲求を満たす可能性を持つ学習活動を一定期間実施し、その効果を検証した。結果、有能性と自律性については正の変化、関係性についても高い平均値の維持が見られ、英語の授業における意図的な働きかけが、学習者の心理的欲求の向上ならびに無動機・外的調整などにグループ化された学習者の動機づけの向上に繋がることが示された。

発表3 小学校外国語活動における電子黒板の効果と新教材『Hi, friends!』の指導法

高橋 美由紀(愛知教育大学)

柳 善和(名古屋学院大学)

文部科学省は、2012年4月に『英語ノート』に代わり『Hi, friends!』を新教材として配布した。この教材は、「CD」等の単独の音声教材はなく、「電子黒板」を使用した指導を行うこととなっている。本発表では、小学校外国語活動における電子黒板を使用することの意義や効果等、更に、具体的な指導法について、実践的なアプローチから述べる。はじめに、小学校外国語活動における電子黒板の効果について、視覚教材と聴覚教材のメリットを活かした教材であることや、児童の興味・関心、学習意欲の点からも、国際理解教育の観点から実際に児童が諸外国のことが理解できる様な教材となっていること、また、コミュニケーション活動としてのモデルを示している等の特徴を述べる。次に、電子黒板を活用した『Hi, friends!』の指導として、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ活動を中心にした指導法を述べる。

発表4 新学習指導要領における中学校英語のデジタル教科書の構成と利用方法について

柳 善和(名古屋学院大学)

高橋 美由紀(愛知教育大学)

本発表では、この4月に発売された中学校英語検定教科書に付属しているデジタル教科書について、その構成の特徴及び授業における利用方法、さらに教室環境の整備の方向性を論じる。2012年度から新学習指導要領が実施され教科書もそれに準拠したものが配布されている。今回の改訂ではデジタル教科書も同時に発売されており、電子黒板の普及に併せて授業での利用が増加すると期待されている。このような現状を踏まえ、実際の中学校英語用のデジタル教科書について、小学校におけるデジタル教科書の位置づけを比較する。また、内容面の特徴に関して、学習面を重視した内容となっていることなどを指摘し、中学校英語教育での利用方法を論ずる。さらに電子黒板の普及の実態を分析し、デジタル教科書利用のための設備面での問題点を論じ、今後の教室環境の整備の方向性も論じる。

<第3室>

発表1 聴覚障がい者による英語の句・複合語アクセント学習についての考察—アメリカ手話と日本手話の比較—

鈴木 薫(名古屋学芸大学短期大学部)

聴覚障がい者のグローバルなコミュニケーション手段として、アメリカ手話(American Sign Language)が挙げられるが、ASLは英語をベースにしているため、英語が理解できないと習得する

ことは難しい。また、アクセントの位置によって意味の変わる英語の句と複合語の識別も、聴覚障がい者にとって難しい。本研究では、取材を通して収集したデータとして、いくつかの英語の句と複合語に相当するASL表現を取り上げ、英語音声表現との間に生じるギャップを明らかにすると同時に、日本語をベースとしている日本手話表現との隔たりに関しても考察する。それによって、聴覚障がい者がASLを学習する事前段階としての英語習得の必要性を明示するとともに、識別が困難となる英語の句・複合語アクセントの習得のための有効な学習法を紹介する。

発表2 屈折形態素のシフトコストにおける非対称性に関する考察 城野 博志 (三重県立四日市南高等学校)

本発表では、城野(2012)で観察された課題切り替え時に発生するコスト(シフト・コスト)の非対称性をおもに課題セット慣性仮説の観点から考察する。

城野(2012)ではSegalowitzたちの実験手法を援用して日本人英語初級学習者に屈折形態素のシフト・コストが句ならびに文レベルで発生することが確認された。さらに同じシフト条件であっても、過去⇒現在の課題切り替え条件ではシフト・コストが発生しないのに対して、現在⇒過去の課題切り替え条件の場合のみシフトコストが生じることが明らかとなった。

Allport et al. (1994)はこのシフト・コストの非対称性が先行課題の課題に対する心構え(課題セット)が自動的に現行試行に持ち越され、現行課題の処理過程に順向的に干渉することで生じると考えた(課題セット慣性仮説)。その仮説によれば、2つの課題セットの強さが異なる場合、非優勢な課題から優勢な課題に切り替えられた方がシフト・コストが高いとされる。しかしながら、Yeung and Monsell (2003)は条件が満たされると、優勢な課題から非優勢な課題への切り替え時においてシフト・コストが高まる事例を紹介している。

一般に、過去形の意味処理は現在形の処理よりも認知的負荷が高いため、前者は優勢な課題、後者は非優勢な課題とみなせる上記の2つの先行研究に照らすと、本発表でのシフトコストは、非優勢な課題への切り替え時でのコストの発生とみなすことが出来る。

賛助会員展示

株式会社 ニュートン	http://www.newton-jp.com/
チエル株式会社	http://www.chieru.co.jp/
電子システム株式会社	http://densys.jp
パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社	http://www.panasonic.com/
株式会社アルク教育社	http://www.alc-education.co.jp/ (申し込み順)

大会参加のご案内

- 会員の方の参加費は無料です。非会員の方は参加費1,000円を受付でお支払い下さい。
- LET会員として入会手続きをしていただきますと、当日参加費から無料になります。また会員は、LET全国研究大会、支部研究大会での研究発表、紀要への投稿などができます。

LET中部支部Webサイト：<http://LET.lang.nagoya-u.ac.jp/>